

第20回「教育セミナー」 2018年2月24日（土）開催

◆ シンポジウム

テーマ 『 学習指導要領の実施に向けての課題 』

◆ シンポジスト

天笠 茂 先生（千葉大学特任教授）

清水 静海 先生（帝京大学教授）

針谷 玲子 先生（東京都台東区立蔵前小学校 校長）

◆ コーディネーター

北 俊夫 先生（国士舘大学 教授）



新学習指導要領実施に向けての課題につき、4人の先生方が熱い議論を交わされました。  
盛り沢山な内容から、要点を紹介します。

## ◆ 基調提案 「新学習指導要領の目玉となるもの」

千葉大学特任教授 天笠 茂先生

### (1)改訂のグランドデザイン

- 外国語教育の充実、アクティブ・ラーニングなどのキーワードが注目を集めているが、まず、全体像を押さえる必要がある。
- 全体をまとめるコンセプトは「社会に開かれた教育課程」。その実現に向け、「学びの地図」として学習指導要領の構造を見直すと同時に、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)、カリキュラム・マネジメント等の手立てを明記した。

### (2)育成を目指す資質・能力

- 新しい学習指導要領を見る視点として、教育の質をどう高めるか、どう深い学びを進めていくかが一つのポイント。
- 育てたい資質・能力を明確化し、「3つの柱(知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性)」として整理。新学習指導要領では、各教科の冒頭にある「目標」のところに明記されている。
- この点を各学校で共有すると共に、改めて自校の学校教育目標を見直すことが、各学校で今後取組むべき課題になる。

### (3)カリキュラム・マネジメント

- カリキュラム・マネジメントには、①教科横断の視点で、②PDCAサイクルを確立し、③効果的な資源の活用、という3つの側面がある。中でも大きなポイントは、①の「教科横断」である。
- 教科横断は資質・能力の育成と高い関連がある。  
「深い学び」とセットであり、「主体的・対話的な学び」と連動して「社会に開かれた教育課程」を実現する手立ての一つである。
- カリキュラム・マネジメントは教職員が一体となって取組む必要がある。  
具体的な手立てとしては、「総則」の理解を、若い先生から管理職まで全員で、組織として共有することが重要。



**改訂のグランドデザイン**  
—「社会に開かれた教育課程」という理念—

①社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

②これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い、関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求めらるる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

③教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

○学習指導要領等の枠組みの見直し(「学びの地図」)  
○「主体的・対話的で深い学び」の実現(「アクティブ・ラーニング」)  
○「カリキュラム・マネジメント」の実現

**<教科横断>**  
—教育課程全体で取り組む課題—

○道徳教育と全体計画

○現代的な課題  
・環境教育 ・キャリア教育 ・情報教育 ・防災教育  
・食育 ・ESD ・プログラミング教育 など

○言語活動の充実<横串を刺す>  
国語科が、中心的役割を担いながら他教科等と連携して言語能力の向上を図るとともに、国語科が育成する資質・能力が各教科等において育成する資質・能力の育成にも資することがカリキュラム・マネジメントの観点からも重要である。

## ◆ シンポジウム

(1) 基調提案を受けて

**清水**：教科横断という点で、算数では「統計」などは合科的に捉えることが重要である。情報化社会を賢く生きるために算数・数学の考え方が役立つことが広がればと思う。

**針谷**：中教審の内容は瞬時に学校に伝わっていたが、まだ現場の受け止めは難しい。個々の言葉に囚われすぎると、学校の教育目標がわからなくなる。全体像の捉えが大切。

**北**：たくさんの新しい用語に新鮮味を感じるが、従来も使われてきた用語との区別がわかりにくいものがある。「教科横断的」と「教科等間の関連を図って」、「PDCAサイクル」と「地域資源の活用」など。これまで通りでいいのか、そうではないのか。この点を明らかにしていきたい。

(2) 学習指導要領改訂に関する疑問

**針谷**：授業をどのように展開していくか。具体的には時数、コマ数など現場としては頭が痛い。時間割の考え方を変える必要も感じるが、どのように考えたらよいのか。

**天笠**：モジュール化などは学校の実情に応じて採用すればよいが、小学校では難しいこともある。安定的な運用を考え、現状を前提に、月や学期、年間単位で改善を図るのも一案では。

**清水**：これまではカリキュラム・マネジメントは教務、管理職の範疇とされていた。担任はどう関わればよいのか。

**天笠**：マネジメントは管理職という暗黙の住み分けを変える必要がある。担任も、授業や学級経営で学校の教育目標の実現に貢献している自覚をもつことがポイントとなる。

**北**：自分の教科の指導要領に目が行きがちだが、全ての先生が「総則」から入ってほしいということだと思う。審議の段階で話題になった「アクティブ・ラーニング」という言葉が、「主体的・対話的で深い学び」に置き換えられると、今までと変わらないのではと捉えられなくもない。実際の授業でどのような子供の姿が見られればと考えているのか。

**天笠**：「教科横断的な」という視点に、深い学びというニュアンスが込められている。例えば、算数で割合を学び、社会の貿易の学習でそれを活用するなど、両方の教科で学んだことを生かすなどが考えられる。

**北**：研究授業などで指導案に他教科との横断的な指導の視点で項目を新設するなども、教科横断的な学習を進めることになると思う。

### (3) 学習指導要領改訂をどう受け止めたか

**清水**：一番関心のあることは、学習指導要領の構成上、教育の質を高めるという課題にどう応えるかという点である。平成元年度の改定から重要な課題として議論されてきたことであるが、30年を経て今回の改定で、よくここまで前進したと思う。今までの総則は、留意事項を集大成したまとめりであったが、今回の改定では、学習指導要領全体の骨組みを示し、鳥瞰できるものとなっている。ここに意気込みを感じる。

また、「理解」という言葉の位置づけがはっきりしたことにも注目した。三つの柱の本質にかかわる「理解」として今までの考え方から広がってきていることを認識して対応していかなければならない。これからの研究のきっかけをいただいでよかったと思っている。

**針谷**：全国の校長対象の調査では、新たな教育施策で重く受け止めていることとして、小学校英語の教科化が66.5%であり、時数の確保、教員の指導力、教材などが課題とされている。次に、「主体的・対話的で深い学び」の学習への導入、特別の教科道徳の充実に関心が高い。

特に、「深い学び」の「深い」をどのような視点で授業の中で組み立て、授業改善につなげるのかが課題である。

### (4) 教科の視点で注目するのは

**針谷**：多様な話し合い、議論を通して「考え、議論する道徳」が4月からスタートする。

道徳の時間がどのように行われてきたか、学校により違いがあるが、道徳の授業は、児童が主体的に取り組むことが大切である。評価に関しては、授業のどこを切り取って通知表に書くのか、資料をどう集めるのか、授業の流れでの見取り方など、細部を考えるとまだまだ難しい側面がある。

外国語科については、外国語活動と外国語科の違いを現場として理解して取り組まなければならない。

**北**：新しい学習指導要領の社会科を見ると、「着目する」「～を調べる」「まとめる」「表現する」などの「動詞」が多く登場する。従来、学習指導要領は教育の質を保障するものとして大綱を示すものであったが、今回は、指導方法を丁寧に規定し、具体化・明確化するものとなっている。

現場の反応としては、教えやすくなったという受け止めもある一方、教え方については自由度を与えてほしいとの意見もある。

**天笠**：1時間の授業を充実する研究だけでなく、単元という観点での授業研究をこれから提起してほしい。

また、言語能力の確実な育成について、国語科の枠だけでなく教育過程全体に位置づける点も重要である。



## (5) 実施上の課題と対応策



**清水：** 授業改善のキーワードは「主体性」。

子どもの主体的な学びが注目されるが、教える先生の側の、教えに対する主体性も忘れてはならない。

ここで重要となるのが、計画である。年間や単元の計画をどう質的に高めるかがポイント。

言語能力の育成ということでは、最近のPISA調査で言語の捉え方が広がっている点を押さえない。算数・数学で扱う記号や式、図表などは、コミュニケーションの大事なツールとして世間で認識されている。これを踏まえ、広い意味での言語観で対応する必要がある。

この移行期間に関しては、「深い学び」との関連で、全ての教科で、「見方・考え方」をポイントとしたい。各教科の情報を学校全体で共有し、全面実施に向け、可能性やなすべきことを整理していただければと思う。

**針谷：** 学校を運営する視点では、教育課程をどう組んでいくかが課題。

「社会に開かれた教育課程」という理念を実現するため、地域や保護者と共有しながら議論を進めていく必要がある。

もう一つ、今、各学校の課題となっているのは、特別な配慮を必要としている児童への対応である。どの子も楽しく授業に参加できる方策を模索していきたい。

**北：** 教師教育の視点からは、校内研修の充実、とりわけ授業研究を通して教師の授業力を高めることが重要だと考えている。教師は学校で育つと言われる。各学校で校内研修を充実させることが、学校活性化の起爆剤となる。

**天笠：** 学校体制づくりのヒントとして、「やめる、続ける、始める」という3つの視点で現状を再整理することを提案したい。

これまでの学校は、どちらからというとは拡大路線だったが、今後は、「スクラップ&ビルド」の発想で、慣習・慣行を見直すマネジメントが求められている。学校評価の在り方も問われている。総則を校内で読み合わせ、学校としてのアイデアを結集してほしい。

## (6) フロアーからの意見・感想

- 教務主任としてカリキュラム・マネジメントの検討をしている。  
学習指導要領を読み込み、新しくビルドされたことと、クラッシュされた部分を比較することが大事だと思った。
- 求められる資質・能力をどうとらえるかについては、学校、子どもたちの実態を踏まえ、学校の全職員で考えていくことが大切だと分かった。自信をもって進めていきたい。

## (7) 先生方への一言メッセージ

**清水：** 自立して創造的な営みができる子どもの育成が求められている。

「守・破・離」と言うが、これまでの教育モデルは「守」に重きが置かれていたのに対し、今後は「破・離」も大切。先生方はそれぞれの立場で頑張してほしい。

**針谷：** 学校のもつ素晴らしい資源、強みを見直すことが大切。現状を分析し、できるものとできないものを整理した上で方針を立てて学校運営に取り組み、「社会に開かれた教育課程」の理念を実現していきましょう。

**天笠：** 今、学校に必要なのは、教科の専門性を背骨として、教育課程との関連をもった指導である。

教育委員会の指導主事の先生へのメッセージとなるが、学校へのアドバイザーとして、教育課程を指導できる指導主事であってほしい。



※本文中の肩書きは本シンポジウム開催時（H30.2.24）のものです。